

平成25年11月21日

総務常任委員会 行政視察報告書

田畑 庄司 議長

総務常任委員会委員長	南 英太郎
副委員長	田崎 妙子
委員	田畑 庄司
	藪内 留治
	谷口 美保子
	南野 敬介
	田中 学
教育委員会事務局	鈴木 司郎
	宮瀧 秀一郎
	山下 勝也
議会事務局	浅野 淳一

平成25年10月17日の行政視察について、下記の通り実施しましたので報告します。

記

視察日 平成25年10月17日（木）午後1時半～4時半
参加者 南英太郎、田崎妙子、田畑庄司、藪内留治、谷口美保子、南野敬介、田中学
（教育委員会事務局） 鈴木司郎、宮瀧秀一郎、山下勝也
（議会事務局） 浅野淳一

視察先

奈良市教育センター（はぐくみセンター）

視察内容

- ・ 奈良市の教育について
- ・ 「奈良学」のとりくみについて
- ・ 家庭・地域の教育力向上の取り組みについて
- ・ 奈良市野外活動センターの取り組みについて
- ・ 教育センターの機能、実施計画等について
- ・ 教育センター施設の視察

奈良市の教育について・・・中室教育長

36万5千人の中核市である奈良市。東大寺の「お水取り」で有名だが、1260年の間、一度も途絶えることなく続いてきた行事である。観光客の帰ったあとに、「十面悔過」「五体投地」が行われている。お坊さんが、二月堂の中で2ヶ月間懺悔しつづけ、五穀豊穰、無病息災を祈り続けているこの行事が、なぜ一度も途絶えず続けられてきたのか、また、行事を支える奈良の人たちの作業がどのようなものかを学ぶ。「行事」を深く知るために、東大寺のお堂に毎年、校長始め教職員にも「行」を見てもらっている。

自分のお金と時間を使って深く知ってほしい。深く知れば誰かに話したくなる。それが、「世界遺産学習」。奈良における一つ一つの行事や世界遺産について、「深く知る」ということが大切で、それが地域を愛し、誇りに思い、誇らしげに語ることにつながる。「誇り」は「生きる力」の基礎となるもので、一人一人のアイデンティティにつながる。「自分の街が素晴らしい」という感情は、自分の考えや価値観、生き方につながるもので、グローバル社会においてもなくてはならない大切な部分である。



「どんな難しいことでも、話し手が上手く伝えれば、3歳児でも理解ができる・・・」国立博物館学芸員・西山さんの言葉にあるように、奈良では幼稚園から「世界遺産学習」を取り入れている。「幼児期の原体験」感動体験が、小中学校になると「深く知る」ために学習をしていくことにつながっていく。



「教育とは」教養を身に付けること。「正倉院」展は、義務教育のうちに子どもたちに一度は見せたいと思っている。全教科、できる授業で工夫しながら、「世界遺産学習」を位置づけて勧めている。

「奈良学」の取り組みについて・・・教育政策課課長 石原氏

平成14年から 小学校5年生を対象にして、世界遺産の現地学習が始まり。現在すべての学年、学校で行っている。総合的な学習の時間だけでなく、書道や美術、社会など 対応。

推進のためには・・・

教育ビジョンに位置づけて教育長自らが啓発を行い、大学や関係機関と連携して幼稚園から高等学校まで取り組んでいる。

学習の目標は次の3点

- ① 奈良のよさを深く理解し、奈良に愛着を感じ、奈良を誇りに思う子どもを育てる。
- ② 文化遺産の創造や継承、保護や取り巻く環境の維持に長い年代を通じて取り組んできた人々の思いや努力を共感的に理解し、文化遺産や自然遺産を尊重する態度を育てる。
- ③ 奈良の文化財や自分の生活をとらえなおし、国際理解や環境、平和・人権等の現代的な諸課題について意欲的に学ぶ力を育てる。

教育委員会として、実践事例集を作成。世界遺産学習現地研修会や授業づくり研修講座を開催するなど、支援体制を充実している。また、「世界遺産学習全国サミット」に参加し、全国に呼び掛けるとともに実践発表の機会として提供している。

家庭・地域の教育力向上の取り組みについて

社会の複雑多様化や子どもを取り巻く環境の変化から、学校だけが教育の責任を負うのではなく、奈良市の教育ビジョンの一つとして、地域全体で子どもたちを守り育てる体制を目標に掲げている。その中で中学校区を単位とする組織づくりと地域コミュニティの活性化、地域の教育力の再生等を目指し、「地域で決める学校予算事業」を実施している。これは各地域教育協議会で協議・立案し、地域や学校の実態に応じた教育活動を展開するもので、地域フェスティバルや講演会の実施、挨拶運動、読書運動、運動会や百人一首大会を実施し地域で交流を行うなど取り組んでいる。

(課題) 学校・教職員への理解が不十分、コーディネーターの事務負担が大きい、PTAや保護者の協力が十分でない、行政の事業に関する方向性が明確でないなど。お互いが責任をもって、子どもを育てていく。いい意味で学校へ地域の人が入っていくことが重要。



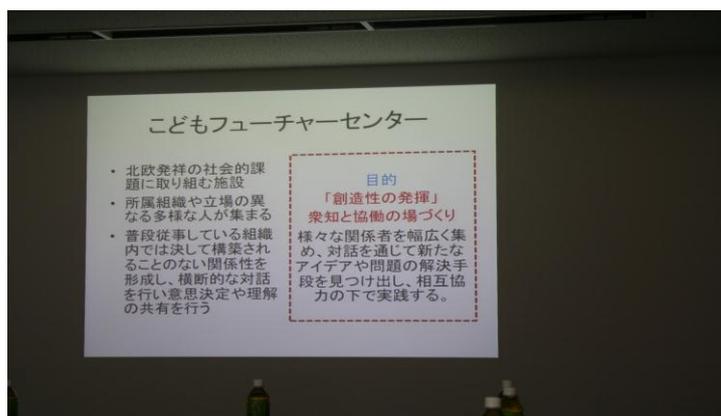
奈良市野外活動センターの取り組みについて…学校経営研究所 三宅氏

当センターは、平成 20 年度までは市が施設を直接運営しており、財政面から非効率であることから廃止を検討していたが、自然とふれあう場所にしたいという地元市民の願いを継承し NPO が運営するところとなった。

NPO が運営する際に 3 つの事業戦略を立てた。一つ目は多機能化で、今までの野外活動センターにプラスアルファの役割を持たせるということ。二つ目は多様化で、野外体験教育だけでなく多様な教育事業を展開するという。三つ目は地域の活性化につなげるということ。

そこで市民参画のもと 20 分野 14 事業を展開することとなった。多機能化としては野外活動に加え、環境学習、教育研修を実施。多様化としては、自然体験、親子活動支援、青少年交流、国際交流活動を実施。地域活性化として荒廃地活用、地産地消支援などを実施。

経営の柱を「義」（正しい行いを守る、意味を考える）、「志」（心が目標を目指して進みゆくこと）、「絆」（人の結びつき、支え合い助け合い）の 3 つとし、「地域の子どもを、地域で育てる」運動のために必要なことは何かを追求し、互いに協力し合うことを共通理解して運営している。



奈良市教育センターの機能、実施計画等について…

豊かな学びを保障するとともに、奈良市教育ビジョンの「めざす子ども像」の実現をめざし、また、本市の中核的な施設として、奈良らしい教育や特色ある教育を創造するための研修を実施。様々な教育課題の解決を図るために平成 23 年に設立された。

はぐくみセンター内の 6 階から 9 階までに施設があり、6 階は教育相談フロアとし保護者や子どもの相談や発達検査等を行う。7 階の教育研究フロアは教科書センターやカリキュラムセンターがあり、教職員の教材研究に活用するための教科書や研究紀要、指導案等が配架している。8 階には研修講座室があり、教職員の資質能力の向上をめざした奈良らしい特色ある教育を創造するための研修を行う。9 階はキッズ学びのフロアとして、プラネタリウムやものづくり工作室、キッズサイエンスラボなど子

どもの知的好奇心や探究心を高める施設となっている。また、200人を収容する大講座室を設置している。



【質疑応答】

Q 教育長として指導者はどうあるべきと考えるか。

A 「子どもをばかにしてはいけない。3歳でも、子どもの感性でしっかりと話せばわかる。」と西山先生からいわれた。教育の原点はここで、教員はいかに教材を工夫して準備し、わからせ納得させることが大切である。

Q 学習の内容が多く、授業時間の確保やとりこぼしている子どもがいる中で、どう努力していくのか。

A 小5で現地見学を行っているが、ネットワークを広げボランティアを活用して実施している。子ども達にはボランティアの生き方からもしっかり学ぶように指導している。

Q 教育センターの相談の利用者数は

A 平成24年度は2,500人、23年度は2,400人、25年度前期では1300人である。

Q 教育センターのスタッフ数は

A 特別支援関係では4名の教育相談員などのスタッフと指導主事2名、心理相談員・常駐が1名、曜日で変わる相談員が日に1名。

教育支援課では9階では臨時職員7名、指導主事3名、研究担当指導主事4名、カリキュラムセンター職員1名、図書館支援スタッフ職員1名、研修にはのべ1万人ぐらいきている。

Q 「地域で決める学校予算事業」の予算は

A 総額8000万円（市が6900万円、国の補助が1100万円）を22地域に学校数、児童生徒数に応じて振り分けている。

視察を終えて

教育長はじめ、非常に熱い思いを持って、「世界遺産学習」だけでなく、いかに子どもたちに本物を教え、生きる力を身に付けさせるかを教えていただいた。教育センターだけではなく、野外活動センターでの関わりや地域の人たちとの教育活動など、多種多様な取り組みについてお話いただいた。3時間半という時間では、ものたりない内容で、もっと深く知りたいことがあったが、貝塚にある施設や人材を使って、「貝塚学」を進める上で、参考になった。